

「牧師のスタイルの壯嚴さるればされるだけ、祈禱聲や講演節のレファインさるれば、されるだけそれだけ無感激なのは奇蹟ぢやないか」と突ツ込む人もあれば「御前達は懺悔々々と説ふが、本當の懺悔なら人の前でする道理が無い。食傷して嘔吐はくのに、好んで人の前で吐く奴は正氣ぢやあるまい。眞の懺悔とは獨り窺かにやつて悪かつたと思ふことは、再び人に施さぬことが眞の懺悔といふものだ。懺悔なるものを同情を購ふ爲の代償と心得てゐるやうな人間が、烏滸がましく他に對つて信仰を説くのは恐ろしい罪惡であると懺悔せよ」と叱りつける者もあつたので、わたしは大に過去の非を悔ひ、牧師を廢めると共に、不圖、念佛を繼へる氣に變りましたぢや。それも死んでから極樂へ遣つてもらはうとも思はず、何かの御利益があらうとも考へないで、何かなしに念佛する氣になりましたぢや。長期間、神ぢやの、恩寵ぢやの、愛ぢやのと、聖書の文句ばかりを捻練つて、殊勝らしく振舞うて居た其の反動でもあるでせうが。一つは子供の時に、母が念佛するのを聞くともなく聞いてゐたからでござせう、何事でも初めの事が終りの事ぢやと言ふのも嘘ぢやござせんなあ。斯うして念佛するやうになつてから、何時しか念々清徹の内臟が明瞭して來ましたよ。と、言うて今日

の權力化し骨董化し、商業化し、興業化した眞宗などに對しては、唾吐き掛ける勇氣もござせぬ」

親鸞に歸依され基督教に對する愛想盡しを言はれて、Mさんは、少時言葉を途切らしたが「御存知の通り募財勸財によつて、纒に其の存在を認められつゝあるかの本願寺が中心となつて、俄然活動を始めたのは、羅馬使節反對運動でござすからな……平素何等教化の事について音沙汰のない彼等は、外交上の便宜に資せんが爲の使節交換問題に、決死的抗争を敢てするとは、衆生濟度の聖業者の末路も亦た哀れぢやござせんか。健康體は殺菌力に饒む、いき／＼した樹木は、暴風に苛められるほど、地中に根を下すものでござすが、ヴァティカンから坊主が一人來るといふ事が、一大驚異に値する我國の佛教界は、申さば頻死の重病人でござすよ。如何に家康將人の樹てた封建宗であるとはいひながら、今猶、伴天連法度を行ふなどは、悲惨なる滑稽ではござせんかな。彼等は宗祖親鸞が「法然聖人流罪に遭ひ玉はずば、我又配所におもむかんや。若し我れ配所におもむかすんば、何によつてか、邊鄙の群類を化せん、是れ尙師教の恩致なり」と叫つて非常に喜ばれたと誇つてゐるぢやござせんか。然る

に、官費で羅馬の眞ん中に行かれる絶好機会を、死物狂ひになつて破壊するとは、何事ぞせうか。此の機会を利用して、何故超世の悲願を宣傳しないのでせうか。而も彼等の反對理由は、日本は國家至上主義であるから、教會至上主義の羅馬へ行く必要はないといふのぢやさうでござすが、彌陀信仰は、國家主義教育主義とか、教會主義いふやうな、爾麼偏執固陋な迷妄を覺破する雷音ぢやござせんかな。自ら國家てふカテゴリーに閉籠つて了つては、所詮、國外へ宣傳することは能きませぬ。國外に宣傳の能きない信仰は國內にも用をなさぬ。用をなさねば、必ず害を爲すものでござすよ。さうした頭であるからして、日本の佛教徒は古代の印度人に殺されちやつたのでござせう。熱帯地方で行つてゐる事を、強めて眞似するやうになつたのではござせんか。彼等が觀念の遊戲に止まつて何等實行力のないのも、それが爲でござす。さうした法衣をつけた墓石が、墓を蹴つて生きかへらうとする對手が恐ろしいのも當然でござせう。聞く所によると、日本のカトリック教では俄然何萬とかの信徒が、一時に増えたさうでござすが、其の原因は本願寺が先頭に立つて、巧妙なる傳道を演つて呉れたからだとの事。まさかヴァティカンから運動費を戴いた譯でもなからうが、死物が活動す

ると其の結果は妙なことになるものでござすよ、はゝゝゝ」

親鸞聖人の還來

と、佛教……殊に眞宗を、基督教同様、痛罵せられるMさんの言葉の底には、如何に基督を愛はれ、眞宗を愛はれることの深きものあるかが察せられる。罵倒！ 何とした讚美の聲だらう。地獄一定！ などと彌陀に甘へた親鸞の心根も偲ばれて來るではないか。達磨の無功德の如何に大功徳であるかと察せられる。底ひも知れぬ信仰は、甚深無限の大疑惑ではないか、世に闘争以上の親みがあるであらうか。といつても、對手を小さくして讚美した了見で居る人間には解るまい。などと思ひつゝ私は、

「イヤ、成程、お説は一應御道理に聞えますが「説似一物即不中」で、一端の類似を見て、三隅の非似を覺られぬ御議論にも聞えますね。あなたと私が、斯うして行き會ひましても、行き先は全然違ひますからね。はゝゝゝ」

私が斯う言つて笑ふと、Mさんは、

「でもなあ、佛が人は即ち宇宙であると言はつしやつたのはクリストが「人は神の姿に型どられて造られしものなり」との證言や、彌陀佛が成佛して以來、已に十劫を経たりと云ふのと、神が天地を創造つたと云ふのと一緒であるし、神の攝理は彌陀の願力ぢや御座せんかな。神は己れに倣つて人間を創造つたといふことは、一切の人間は佛に成れるといふのと一緒でござして、神と人とは一體であり、自然と人生も一元と觀爲すべき證據でせうぞ。其のことが全く體驗された時に、人生の最大幸福は實現され、主觀と客觀、一と多との問題は渾然として解決されるので御座せう。要するにそれは、神と人、靈と肉との一體が、説かれてゐるのではござせんかな。彌陀の本願とは、宇宙生々の力を云ふもので、萬有即佛陀、現象即實在の心では御座せんか。「國に地獄、餓鬼、畜生あらば、正覺を取らじ」と、誓はれた法藏比丘の願力なるものも亦た、神が天地を創造つたと云ふ觀念と一致するではござせんか。一時佛在は、三世多佛であり、一切如來は、釋迦如來であり「一身清淨なれば、多身清淨なり、多身清淨なれば草木瓦礫悉く清淨なり」と古徳も曰つてござるからな。それに有限の神は、無限の佛智を肯定して、汎神即ち一神であることを示してゐます。「宇宙は水にて生成

せり」と、ターレスが言つたことは事實であり、人が土から出て土に還るといふ昔の詩人が謂ふたのも虚偽ではござせん。同じ太陽の出入を、飛彈の高山の樵夫が山から山へ、大島の漁夫が海から海へ、江戸の町人が家から家へ、と見たのも當然でござせう。相對性原理が絶對的眞理なら、一人が一切人を壓迫するのも共產主義でござらう。はゝゝ。要するに、人は自然に歸へれば可い。否、明恵上人の謂はれたやうに「阿留邊幾夜字和」にあれば可い。老子の所謂「事をして事を定めしめ、名をして名を定めしむ」れば可いので御座す。パミール高原に立つて、タシケントや、サマルカンド地方を見渡した原始人の頭に、天國は構築され、新疆や蒙古乃至支那方面を眺めつゝ暮した原始生活に、淨土思想は描き出されたといひますぢや。日出で、先づ萬古の雪を被つたヒマラヤ山頂を照した、サブライムな光景に撃たれて、大日如來の信仰に導かれた印度アールヤ人は、ガンヂス河の彼方、遙かの印度洋に没する夕陽の寂光に引きつけられて覺えず、南無阿彌陀佛と讃つたものでござせう。「分段生死」の愛河を渡つて但空法性の彼岸に至る四諦十二因縁も、佛果菩提に到る菩薩の六度船も、彼の國土に到る凡聖逆誘の乗合船も、其處から纜を解いたので、私共が黙する考へもなくし

て黙した時、思ふまいといふ思ひすらなくなつた時、私共の心に閃き出づる光は、極めて自然にして必然なもので御座すからなあ……既成概念や、一切の因襲習慣から脱し得た姿は自然に歸つた姿で、其の姿に在る心境には眞實へと引かれ行く魅力が感ぜられます。私共の未來は斯くして眞實の光に培はれ行くもので、而も其の光は永久無遍に人心を照すでな。父は子の爲に殴ち、母は子のために詫びるのは、人情自然の流露で御座して、其處には愛の輕重はござせん。私は爾ういふ意味で、親鸞の母的愛情と基督の父的權威の信仰に區別を設けません——無論區別はござす、あるはあるではすが、それは形式の相違でござして、其の根本精神に於ては分つべからざるものと信じますぢや。親鸞聖人が「良に知んぬ徳號の慈父無さずば、純生の因縁けん、光明の悲母無さずば所生の縁垂きなん」と廣本行卷に説かさつしやつたのも、結局さうした消息でござすよ。人は形式に囚はれて信仰の異同を論じまするが、他人の信仰は他人に任せるところに自己の信仰が生き、一切の人のおの／＼が有つた自由を侵さぬところに自己の自由があるのでござすからなあ。之を釋尊が「普賢の徳を尊ぶなり」と申されたのでござせう。しかしあるとかないとかの範圍には信仰はあり得

ない。信仰には絶對議論を許さない。飢るいから飯を食ふので、飯を食はねば生きられないといふ理窟から腹をふくらすのではござせんからな。尤も基督教にせよ、佛教にせよ、宗教である以上、よしや其の宗教の信仰を築き上げる爲に、諸種の哲學的思辯が、理論的概念を包容し發表するにしても、爾うした思辯概念は、其の宗教的信仰の附屬であつて、生命ある宗教を理論に翻譯したものに過ぎませんでな。尤も佛教は眞想郷たる印度に崛起し、ウバニシヤド哲學に智識を練りたる婆羅門に對抗した佛教としては、信仰の體驗と共に思想の組織、鍛練を齎すのは當然の成行で、グノン派の思辯を始め、希臘思想と接觸しては、その始全然實踐窮行を生命として起つた基督教とても、漸次哲學考察に入らざるべからざりしと同じでござせうよ。併し、純粹に哲學の理論を以つてすれば、佛教は必ずしも婆羅門に勝つたものともいへない如く、基督教亦た猶太教に優つたものとも斷へぬでござせう。佛教の宇宙觀が婆羅門と等しく、ウバニシヤドの哲學に根ざせる如く、基督の人生觀亦た猶太教のそれに基いてゐる。今日、佛教も、基督教も減んでゐるのに、婆羅門や猶太教が残つてゐるのも怪むには足りませぬ。彼等が種族の上に建てられた理論佛教哲理と習慣に築かれた儀式の上に立て

るに反し、佛敎や、基督教は人格に依つて存在し得るのでござすからな。いや恠麼事を申すものゝ、結婚が戀愛の墓である以上に、宗派の形式は信仰の墓ではござせんかな。光嚴院天皇が「朕死すとも墓をつくるとはならぬ。墓は狐狸の棲家であるから……」と仰せられたとか。成程、教派とか宗派とかいふ墓にも、生きた人間は住りませんぢや。私共は狐狸妖怪に瞞かされて、自己の行くべき自己の道を誤まつてはならぬ。指に遮られて月を見ることのできなない人は哀れむべき人ではござせんか。「魚を得て網を忘るゝ」といふ但言もござすでな、神は自分一人の爲に天地を造つて呉れました——基督教の一人子であるといふのも、「五劫思惟の誓願も、偏に親鸞一人の爲なり」といつたのと一緒であり、機法一體して、罪の子を神の子にしてくれた基督も尊いが、迷ひ子であつた私共を、親の許に連れて来て呉れた親鸞も懐しい。然し、自然法爾の無碍光に攝取され、限り無き大いなる神の力に抱かれたる以上、最早祖師も教主も何にも要らない。況して麵麩を求むるに石を抛げつける教會や寺院は尙更ではござせんか。佛は自分の如うな罪の子を淨土に迎へて下さることが分り、神は自分の如き大罪人をも赦し玉ふと信する心に、祖師も教主も還來されますからなあ。といつ

て私は、さうした人の差別相を見逃すのではござせん。東西南北それぞれ趣は變つて見へるが、何れも同じ光り、同じ空でござすからな——斯うした差別の中に永劫不變な光の貫流を拜することが能きる。法然や親鸞の慕ふた淨土を、瓦礫の焦土と罵つた處に日蓮の生命がある。聖道門を群賊に譬へられつゝも、善導は禪定に勵まれたではござせんか、末法到來の憂ひは其の儘にして「生彼國土」の歡びでは御座せんか。「如來の遺弟悲泣せよ」と親鸞の悲泣せられた末法を「佛法未だ滅せざる今の世に生れ來し吾等は何といふ幸福であらうか」と道元禪師が讚はれ、明惠上人がこの世を釋迦牟尼佛の昔に還へしたいと願はれ、親鸞が「此の世を厭へばこそ念佛を申すのだ」といはれたのは、皆同じ意味を語るものでは御座せんか。道元、明惠乃至日蓮のやうな、自力聖道の聖者が、言ひ合はしたやうに、父母を慕うて已まれなかつたのは、過去無數劫に於ける一切衆生に對する歸依の念でござすからな。この三世に亘つて其の儘にして、無邊際なる未來の衆生に對する歸依の念でござすからな。この三世に亘つて一切衆生が取りも直さず父母所生の自分自身で御座すからな。差別的な、箇立的な斯の自分自身が、時空を貫く一切を攝取し得ることは、偏に彌陀に歸命して、念佛の一行に依る心

で御座せうぞ。現實を如何に理想化せむとするも、所詮なし難き場合、地上に齋すべき天國を、天上に築いた基督の内部世界といふものは、東方に釋迦を仰いで會へない悲しさを、西方の彌陀に依つた親鸞の心で御座せうよ。さうした表現形式は、生命の衣服で御座して、私共が求めなくてはならぬものは、其の生命であり、本體ではござせんか。私共は本質的に其の眞理に没入して行かねばなりません。一切の衣服を脱ぎ捨て、直ちに生命の泉に躍り込めば可いのでござす。また自分が自分で怎うにもならないと、八方塞がりの暗に包まれて踊りも動きも能きなくなると、厭でも光を求め其れに向つて決死的に邁進まなければならなくなりますちや……』

斯ういつてMさんは更に口を緘まれた。私の、應答を促されたものらしい。

『そう虚飾的な都會の貴族が諄朴な田園生活を鼓吹されたり、質貧乏を享樂しつゝ、偽善を賣物にして居る人達が、道を説かれたりせられると、風の音、水の密囁までが、愚弄の響、嘲笑の聲に聞えますが、悪人とか罪人とか思はれて居る人達の敬虔な態度に接しますと、何とも云へない生の崇嚴に撃たれますやうに、鬼のやうな荒くれない人達が襟を正される瞬間

には、如何なる聖者からも與へられない美しい光を與へられるものであります。それに無名無産の人は、生の極から極へと動いて行かれるやうであります。恰度妻を有たないで所謂「法喜」を妻とし、子を愛する代りに、一切衆生を愛せんとせられる高僧達が、山中幽邃の地に生活して居られました如うに、罪業深重の思ひに堪へ兼ねる心其の儘が、衆生濟度の悲願であり、自己の暗愚を覺る人にして、初めて眞の善知識でありますやうに、無名無産の人達は、眞の極致に觸れつゝあられるのではありますまいか。ボウロも「貧は賢い者から見れば愚かであらうが、自分等の如うに神に救はれたい人間に取つては大いなる力である」と曰はれ、「外見の醜いものほど内部に美しい光が藏されてある」と、ロダンが云はれた、妻を喪うて限り無き悲嘆に暮れ、生死亦た大事と覺つた莊子にして、初めて人生を夢と悟る事が能きる、己身を罪惡の本と信する老子にして、長生久視の法がわかりませう。不思議、不思議の心こそ、不咎人、不尤人の心ではありませんか。夢に胡蝶と化つてヒラ／＼飛び廻るの莊子は、大鵬の志望を抱いた莊子ではなかつたでせうか。』

『それや黙つて人を引つける云ひ知れない溫柔味は、何かに自我が殺されきつた其の滴りで

すからな。』

斯う日はれたMさんは、云ひ知れない平和な溫柔な輝きを見せられた。

『イヤMさん！ あなたの信仰は、何もキリストから親鸞に移られたのではなく、多年の間、私に向つてキリストを讃嘆し、私の勧める親鸞信仰を嘲つてゐられたのは、其の實キリスト教に歉らない結果、内心窃に親鸞に憧憬れてゐられたものと思はれますね。然し、眞の愛國者は海外に移住してゐる者の中にありますやうに、眞のキリストチャンはキリストを去つて他宗にはいつた者の中にあるでせう。自分の留守中に自分の妻が他に男をこしらへて竈の下灰までも賣り飛ばして其の男と逐電してしまつたことを知つた時、初めてその妻が可愛ゆくなるとか諷ひますやうに、妻も亦男を替へて見なければ先夫の難有味が解るものではない。男を捨て、他の男と走つた女は必度臨終に先夫の名を呼ぶであらう。親鸞信者に始めて親鸞信者に終るもので、眞に親鸞を信じてゐる者はなからう。親の膝下を去らなければ親の恩は解りません。クリスチャンにして眞にクリスチャンたらんと欲する者は須らく先づクリストを捨つべきです。私共はクリストを捨て、佛教に走つた爲に、クリストの眞實に泣かさ

れてゐます。今日、佛典を繙くものゝ多くはクリスチャンであり、佛教徒以外に聖書を讀むものは少く、婦人雑誌が男子に歓迎され、女が男の眞似をしたがるのも亦無理からぬことでせう。』

私は斯ういつたが、Mさんは黙つて居られる。私は語りつゞけた。

『然し、世間の多くの人は、肉食妻帯だの、教權破壊だの、宗教革命だのと、人は兎角、形式に捉はれて、「未來の樂處」は取りも直さず「現世安穩」であるとの法華を信じ「極樂百年の修業は穢土一日の功に及ばず」と叫んだ日蓮のその如くに、熱情凍り、深怨燃ゆる其の信仰を、直ちに社會的、政治的革新の原動力たらしめんと焦慮した哲人的英雄、宗教的政治家のルツテルに比較したがるやうですが、畢竟それは外形の相似に他なりません。「信心爲本」を本として理窟抜きの眞純なる人間本然の清淨心に參徹した親鸞は「行ひによらず、信仰によりて義とせらる」と、信じたパウロに比すべきものでありませう。等しく暗黒社會……：殺人天下に横行して、市内は富者に專領され、郊外は白晝盜賊横行する恐ろしき社會現象に、己が罪業の深重を感じつゝ、後者は神の惠寵に、前者は如來の大悲に招還へされて、拔

差しならない無礙の一道を、勇往萬進んだ無自覺的翻譯家ではなかつたか。罪の子を神の子に、五濁惡世を安養淨土に翻へさうとした、理想的翻譯家ではありませんまいか、前者の「我は基督と共に十字架に擧げられたり」は、後者が「善き人の仰せをかうむりて念佛して縱令地獄に墮ち候とも何の後悔も候はず」であり、彼が「我活くるにあらず、基督我にありて活くるなり」は此れが「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひたつ心のおこる時、即ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり」ではなからうか。甲の「信仰と祈禱と愛の三徳」は乙の「至心信樂欲生の三信」ではありませんまいか。それにボウロが基督未見の弟子であつた如うに、親鸞亦た法然破門の弟子ではなかつたでせうか。由來既見の弟子や愛弟子には満足なものはありません。十人が十人ながら師の缺點に累はされて、その長所を見通す者や、師の範疇に筈り込んで動きのとれない者はかりではありませんか。總て何事でも遠ざかれれば遠ざかるほど、對者の美を見逃さざらんと力め、接近けば接近くほど其の美しさを見逃すのが人情の常であるからでせう。彼の井原西鶴を無學文盲と嘲つた曲亭馬琴が、西鶴に教へられて居りますやうに、法然を墮地獄と罵つ

た日蓮が、法然に導かれましたのも、畢竟此の遠親近憎の心理作用に由るのです。併し、ルツテルが基督信仰を滅ぼした如くに、親鸞亦た彌陀信仰を滅ぼしました。前者が一種の特殊部落民たる僧侶若しくは貴族、學者等の通用語なる拉句語聖書を普遍的な、民族的な獨逸語に譯して、貴族的な基督教を社會的民衆的のものたらしめたのは、素より時代の要求に餘儀無くされたのでせうが、青が藍に還り、氷が水に復つた如うに其事に由つて基督教は滅びて了つた。それは恰度後者が僧侶や權力者の手にあつた佛教を、通俗化し民族化して、石を砕いて砂に化たやうに、全く消滅させたのと同じではありませんまいか。山嶺から落つる滴りは草を濕し木の下暗を縫ひまして、纏て平地に流れ出ませうけれども、遍く平地に氾濫つた水は海に入つて地上には其の餘滴だも留めないではありませんか。盆に復らぬ覆水を海波の氾濫に求めんよりは、頭を廻らして天上の雲霧を招ぶに如かずであります。蕭條たる秋風に信仰の木の葉の散る夕、人は薰はしく萌え出でんづる道の新芽を積雪堅氷の下に求めざらぬやであります。然し、世に親鸞を以つて耶蘇に比するものもありますが、恐らく其れは神の子としての耶蘇では無く、罪の子としての耶蘇でありませう。然し、「我を信ぜよ」との彌陀の

自覺に生きた耶蘇が、神の獨り子でありますならば、「五劫思惟の誓願も偏に親鸞一人の爲なり」と信じた親鸞亦た神の獨り子でありませう。併し、耶蘇を親鸞に比する場合には耶蘇の師バプテスマのヨハネを、法然と見なければなりません。併し、耶蘇にしても、法然にしても、久しく權者の横暴に苛まれた民族の苦悶の底から、燃え上つて來た宗教改革の精神、社會改造の希望の火に煽り出された先驅者であります。無論、それまでに猶太に在つては多くの豫言者、我國に於ては、遠く聖徳太子に端を發した政教一致の完成——大陸文化模倣の成功紀念碑否、民族統一のシンボルたる寧樂大佛の建立以來、宗教家の生命たりし教理の研究は文字の遊戲と墮り、持戒苦行は形式的律法に化りまして、次第に濃厚の度を増して來た時代の暗を照らす、信仰の點火者が續出しました。空論空想に墮した佛敎を、實踐實行の佛敎たらしめ、枯渴した心靈を濕した生々潑潑たる宗教家としては、傳敎、慈覺其の他幾多の高徳が生まれましたが、何れも破綻せる信仰の綱繩に汲々として世を去り、後世親鸞を立たしめた絶對他力の眞平民、敎信沙彌の如きは、單り敎のみ存して、行證空しき末法の世に、敎行を證した眞信家でありましたが、踏晦孤高の風趣を帯びて自信敎人心の活動なく、空也の如

き、より閑寂なればとて山林より市鄕に下り、下級民や童男童女に交はつて道味法悦の心を歡喜踴躍の様に示し、獨創の處女地に至純な信仰を耕して、道路井溝を開鑿するにも稱名を絶たず、専ら民衆の感化誘引に狂ひ、市聖、市上人、阿彌陀聖の名を博したが、未だ堂々たる表面の手段によりて、時代の精神を徹底せしむるには時機尙早しの感がありましたから、兎角、隠忍の態度に出で、未だ際立つた革命精神の發露は見られませんでした。而も空也が手足と舌とを以つて民衆の敎化誘引に力めたのに反し、空也に導かれた叡山楞嚴院の惠心は、諸法實相とか一念三千とかの理智的唯心的な法華法に代ふるに、事的な感情的な彌陀法を以つてし、墮落せる專家の佛敎を、一洗して一般民衆の上に蘇らしめんとし、美妙端嚴な靈筆を驅つて、曇鸞、道綽、善道等の支那淨土敎徒の所説を明確にし、當時の貴族生活を地獄生活と諷刺つたかに思はれる往生要集其の他の名著を公にし、而も靈彩淋漓たる藝術を藉つて貴族や武士の説得に盡したけれども、傳統の闇は時代の闇よりも深く、在來の敎權を破壊し得る突破力は見られませんでした。次に現はれた良忍に至つて全然傳統の網から脱れ、釋迦の内證たる圓融無礙の華嚴の事理不二と華嚴に機を與へた法華の一念三千の妙法と法華を

詩化した大經を所依の經典として、多武峰賴朝が慈覺の傳へし聲明梵唄を利用して、「十界一念融通念佛、億百萬遍功德圓滿」など、神秘的な、天啓的な信仰體驗を鼓吹しましたが、これとても偽信仰から眞信仰への橋架に過ぎませんでした。廢黜せる自力聖道の諸宗から潑刺たる他力淨土信仰への連絡線に他ならなかつた。斯くて時代は黒團々の深闇に沈み極まりました。一燧の火、猶人心を惹き付けるのに不思議はありません。無學なる下級民の子たる耶蘇の一年半の説法が、當時の教壇を震撼せしめた如うに、在來の諸宗を根底より覆へして全國民を念佛の一火に祇め盡さんする勢ひを齎しましたのは申すまでもなく良忍の弟子寂空の門下生、法然でありませう。法然は寂空に師事したといふものゝ、信仰の根本義に於きましては、初めから其の師を眼中に於ておませんでした。取りも直さず耶蘇とバプテスマのヨハネの關係でありませう。然し、法然が寂空の理論の鼻ツ柱を打碎いて、杖を投げつけられ、寂山を去つたのに比べますと、耶蘇が「視よ神の羹羊」として耶蘇を大衆の前に推舉したヨハネを「凡そ母の胎内より出でしものにしてバプテスマのヨハネより大いなるものは非ず。されど天國のいと小さきものに比ぶるも、ヨハネはなほ小なり」と大衆の前に投出したのは何

とした師匠懐ひの不埒弟子でありませう。神の獨り子と他からも任ぜられ、自らも任じて居た彼としての此の一言は、一溜りもなく其の師を木ツ葉微塵打碎いて而も永久に生かしたではありませんか。これ法然の教化が日本の一分部にとどまり、耶蘇が全歐に其の信仰體驗の影響を及ぼした所以でありませう。然し、耶蘇の態度説教には、法然とは異つて何等成分的表現も無く、其の人格の消滅と共に、其の信仰の何たるかを疑はしむるものがあります。此の點に於て使徒パウロの大膽な、自由な、そして熱切なる信仰表現は、親鸞のそれにも勝つて實に其の師の信仰精神を發揮し得て而も其れを後世に傳ふる力がありました。勿論傳へられた耶蘇信仰は耶蘇の與り知らざる所かも知れませぬ。醇良率直な眞人を、不自然極まる贗罪者に、地から生へ出た人間を、天から降つて來た非人間に祭り殺して、教會の柱にしたかも知れませぬ。この點に於て彼は慥に罪人の首たるの價値は充分でありませう。其處に、聖者の體驗を凡夫の妄念に引下して、民衆と交渉無からしめた親鸞との一致點があるではありませんか。而もポーロに依りて紹介された原人の原罪を贖ひしに過ぎざる基督は、自己深重大の罪を悔ゆる私共には何等の關係なく、出生以前の衆生を顧みなかつた親鸞の所謂法藏比

丘が、成佛以來衆生ます／＼困厄に陥るのも亦た怪しむには足りませぬ。」

耶蘇と親鸞と

「それに又、親鸞が典型的な天台の教義や、哲學的な經論に捉はれて居た如く、ボウロには善を勧めるよりも惡を禁ずる消極的な傾向——道德を感情づくめに鼓吹せんとする應報の教理、取りも直さずパリサイ派によつて是認され、擴大された、爾うした功利的な宗風に捉はれた弱點を雜へてゐました。法然が南都北嶺に對するその如うに、耶蘇が最初から極力此の派に反抗するの已むを得なかつたのは、爾うした點ではなかつたでせうか。然し、法然が南都北嶺を攻撃すべく、之に代るべき論理法則よりも、彼れ自身の信仰的自覺と宗教革命の精神が、具體的に其の人格事業となつてゐるとしましても、彼には其の攻撃の對者たる南都北嶺の倫理的勢力の影響を受けてゐて、徹底した信仰の一面には不完全な思想を混へ、曖昧な態度を見せて居ましたやうに、耶蘇にも爾うした缺點がありました。彼が幼少から嗜讀してゐたのは舊約全書で、其の與へられた教育はパリサイ風であつたにも拘はらず、其の宗教

生活は彼の改宗に初まつて居ます。總て何事でも知られた時は、亡ぼされた其の時ではありますまいか。對者に總てを知られた時は對者に乗てられる其の時ではないでせうか。耶蘇がパリサイ派を棄てたのも、法然が北嶺を棄てたと同じく、對者を知り悉きたからではあるまいか。然し、兩者の改宗も信仰も、悉く實驗から來てゐるのに見ますると、縱令前者に天台の教義が、後者に猶太神學の感化が、意外に多大でありませうとも、本質的には何等累を受けては居りません。併し、ボウロや親鸞になつて來ると、形の上には何等爾うした傳統的影響を受けて居るやうには見えませぬけれども、其の思想の内容には却つて然うした影響を受けて居るかに思はれてなりません。全體ボウロの眞に耶蘇に傾倒してゐたのは、耶蘇攻撃の最中ではなかつたでせうか。基督に最も熱烈なる信仰を獻げてゐたステパノが、基督を呪へるものの爲に、石にて打殺されしを見て會心の笑を湛へ、ダマスコの諸會堂に集まれる耶蘇信者を捉へて、其等の敵の本陣たるエルサレムへ引き摺つて行かうとした時が、彼が耶蘇信仰のクライマックスではなかつたか。併し、向上道の最高は向下道の最底であります。さしに熾烈なりし彼の耶蘇信仰の火は「荆ある鞭を蹴るは難し」との世に亡き耶蘇の靈告

に、耶蘇攻撃の精神——即ち耶蘇に對つて燃え上つて居た信仰の火が民衆に轉下したのであります。謂はゞ向上却來で、往相回向から還相回向に轉じたものと、見れば見られませうけれども、反逆は對者を活かす靈藥であります。降伏は對者を滅ぼす毒藥ではありませんか。基督に對するポウロの反逆は、十二使徒を活かして耶蘇の信仰體験を如實に顯現せしめましただけで、耶蘇に對する彼の降伏は、使徒を殺し併せて自己をも葬つたのではなからうか。爾來羅馬に磔殺されるまでの彼の行動は、耶蘇信仰の毎日に熾烈なるが如く見えて居ります。が、畢竟それは外面的な幻影に過ぎないもので、其の内部的生命の火は毎日に消えつゝあつたではありませんまいか。親鸞亦た然りであります。彼が求道心も「法然聖人の日課七萬遍の念佛も別の方便なり」と嘲り、地獄一定の念佛を以つて、「往生は一定と信へば、一定である、不定と疑へば不定である」など云つてゐた天台淨土とも、禪念佛とも口稱觀方とも分らぬ法然の不徹底さを打壊し、「一念多念有念無念要するに寢言である。懺悔、祈禱、觀法、坐禪、畢竟無用無益である」と、難易混交、聖淨雜居の吉水黨を罵しつて、黨主法然から「彼等は半卷の書をも讀まぬ邪義異端である」と嘲られ「附佛法の敵、獅子身の蟲」と罵られ

たと傳ふ時が、最も熾烈でなかつたでせうか。そして彼が歸洛以後の信仰なるものは、謂はゞ其の情力に過ぎません。申すまでもなく満足の濫費であります。絶望の底、非痛の極にこそ、希望は甦り、莊嚴な全弦が鳴り響き、失はれた魂が正念に呼び返される。一切を捨て、一切から棄てられてこそ、寂莫の莊嚴が無限に我を魂が淨めるのではありませんか。歸依參向せしめられる新しき世界の創造……莊嚴の恍惚境は其處に臨る。そこには何もなくて一切が在る。亡びの世界、死の谷であつて亦た莊嚴なる創造の課程です。あらゆる聖衆、あらゆる經典、あらゆる花實がある。誓願もあり、稱名もあれば坐禪もある、祈禱もある。般若は固より涅槃も、法華も方等も、聖書も佛身も、十字架も、彌高き天國も、一微塵の中に見ることもできれば、山に命じて海に入らしめることも容易です。あゝ骨と共に朽ち果てた宗祖を玩弄ぶ動骨よ。汝の脚下に般若の大智が輝き、事々無礙の法界の描かれる秘訣を覺らんとならば、須く先づ一切を捨てて此の平凡なる神祕に聞け！ 自責の火を取つて頑固な自我を焼き、歸依渴仰の斧を以つて己が心を打毀した時に、自己の眞價が現はれる、それは創造された價值である。其處には心垢一洗般若の法水が迸り、法華の久遠佛は現は

れ、華嚴の事々無礙、如來常住の涅槃の徳相が展開される。極から極に擴がつた蒼空、極もなく亘つた大地……天地に包まれた一切事物が、己が内部に盡くことなき意志の外延であることが解つて来る。眞空妙有の中にこそ、莊嚴なる創造がある。そしてその外には何にもない、神は人間を離れて何事もなし得ない。人間は諸有聖者を創造した。神を創造し、佛を創造し、基督を創造した、老子を創造し、親鸞を創造した。諸有傳説と、あらゆる幻覺と、あらゆる思索と、あらゆる希望が、釋迦を、老子を、耶穌を、親鸞を新しく創造して行く……斯くしてパウロの耶穌があり、ヨハネの耶穌があり、ペテロの耶穌があり、大天の釋迦、馬鳴の釋迦、世親の釋迦、曇鸞の釋迦があり、鎌倉初期の親鸞があり、南北朝の親鸞があり、足利中期、徳川初期、乃至大正の親鸞があるのではないか。信仰の對照は人々皆異つてゐる筈である。同一の儀式を要するものもそれが爲である。一切諸佛が釋迦一佛の化ではないか。印度の釋迦は支那の觀世音、松林寺の達磨は片岡山の飢人であり、梁の寶誌は平安末期の教信ではないか。誰か老聃を龍樹であり親鸞ならずといふものぞ……と叫びたいですね。農夫は農夫の彌陀であり、女人は女人の本佛があるのですからね。』

無甯に語り來たつた私の斯うした言に、
それ仰在るまでもないことで……』

Mさんは、すまして御座らつしやる。

『元來人間は生れながらにして、皆、信仰家である筈です。動物と區別される所以もそこにあるのです。それが動物以下の動物に引摺り下されるのは、皆宗派教派に毒されるからでせう。偉大なりし大和民族の精神を、衰退せしめたのも宗教心でありませう。衰退時代の永き其の不幸は、宗派の未だ起らざる、偉大なる時代に對する永劫の刑罰に變形しました。所謂宗教は大和民族の力強き、大いなる自由を有つた人間を憐むべき僞信家、若しくは無信仰家たらしめた。宗教を口にするを恥づる時代にならなければ、眞宗教は生りますまい。説法に巧妙なるほど報酬の得られる時代は暗黒時代です。基督信者は二千年前十字架に上つて死んだ」と叫んだニイチエは、「到る處に祭司に缺くべからざるものであるかの如くに、一切の事物が整理せられた。信仰ありと信する者は、完全なる無信仰者、全き禍の人である」とも曰ひました。既成宗教は獨創的苦痛を感じしめる人生の寄世蟲ではありますまいか。親し氣な風

貌をして至純なる感情と、強固の意志を有つた聰明な理性と、健全なる精神を、食ひ殺さねば生きられないではないか」とも曰つてゐます。戦争の餘毒……物質豊満の爲に、平和といふ本尊を掲げて、文化宗といふ既成宗教の信者が多い。さうした教團を破らなければ……永遠の光明……即ち眞信仰の火は豈せられませぬ。」

「……」

「若しも信仰者の毒氣に中てられんか、一切の事物に對して初手から歪んで、且つ不正直なる態度に出でなければならぬ。歪みなりに、不正直のまま押し貫さうとする心情を信仰と名ふのである。良心を虚妄に結びつける。治し難き虚妄——虚妄の獨自な地獄的形式である」と、先哲もいつてゐます。」

「それや釋迦も宗教の否定者でござしたし、耶穌も宗派の破壊者でござしたからな。老子や親鸞は論ふまでもござせんよ。」

「要するに、宗教家なるものは先哲の吐いた信仰の繭を、宗祖と共に煮殺して、金襴衣に作り金てふ繭を作る人間を、その繭と共に煮殺して了ふ養蠶家であります。眞の宗祖は繭の外

に羽叩きして、一切地上の眼を覺さしめつゝあるのではありますまいか。」

「しかし、人は絶へて其の名を知りますまい。」

「それや名の知れた時は、既に滅んだ其の時ですからね。」

斯う應つて私は、見ると、不思議にもMさんの姿が無い。私は吃驚して、

「Mさんく！」

大聲で幾度とも無く呼ばりました。應へるものは樹々吹渡る夜嵐の聲……溪流の密囁ばかりです。

月も恐ろしい相に變つて全地を睥睨んで居りますし、星は死の色をして今にも消えさうに思はれる。私は泣くことを忘れて泣きました。

跋

「彼が或る時、或る公園で、遊んでゐると、變な鳥が、其處へ飛んで來た。見ると翼が七尺からもある。目は一寸ほどもある。そんな大きな、よく目の見えさうな鳥なのに、彼れの額のところへ、すれぐれに飛んで來て、對方の樹へとまつた。彼は尻からげになつて走つて行き、狙ひを定めて射止めやうとすると、其の樹の幹に蟬が一匹、涼しさうな葉蔭で、其の身を忘れたかのやうに止まつてゐる。すると、そこへ又、螳螂が斧をふりたてゝ蟬を狙つてゐる。その大きな鳥は、全くその螳螂を狙ふために、その身を忘れて、彼の佇つてゐるのも知らずに飛んで往つたのだつた。そして彼は其處の番人にめつかつて、其處で鳥を射つてはいけないと叱られた。

番人に叱られて彼は、平素の持論にも似ず、外物に迷つて我身を忘れたことを後悔して、其の儘家へ歸る途すがら、海の邊りを通りかゝると、如何にも景色が好さうなので、とある岩の上に腰打掛けて、彼方此方と見渡してゐると、意外にも、彼の目の前に、蛸と鳥賊とが喧嘩をやつてゐる。

烏賊は章魚に吸ひつけられて身動きが能きず、蛸は、烏賊の吐いた墨汁の爲に、目が見えないので、どちらも困つてゐる。すると突然、海鼠が遣つて來た。そして直ちに蛸と烏賊との喧嘩を分けて、仲直りをさせた。烏賊と蛸とは非常に喜んで、何か海鼠に御禮をしようではないかと相談した。お互は斯うして八本の脚を有つてゐるけれど、海鼠には一本の脚も無い、定めし不自由であらうから、お互と同じやうに、八本の脚をこしらへてやらうぢやないかと相談を決め、蛸と烏賊とは早速、海鼠に脚を拵へ出したが、八本目が出來上つた刹那、海鼠は死んで了つた。

何と面白い譬喩ではないか。何と意味深い哲理を籠めた寓言ではないか。目さきの利慾に心奪はれ、身の危いことも忘れる者や、餘計なオセツカイをして無爲自然を打毀し、生命を滅ぼす小利口者……豕に眞珠を與へ、魚が喜ぶだらうと思つて、美女を湖邊に佇たしめる如うな連中を諷する爲の故に、彼はいろんな事を書いてゐるが、其事が妙に深い哲理を語り、豫言が示されてゐる。彼は人間社會の外に立ち、虚心坦懐、自然の魂を見据えてゐる。彼は社會の内につくまつて社會を律しやうとして居る智者、學者乃至宗教家の類を氣の毒がつてゐる。そんな狭苦しいことでは、人生

の眞味は分りやうがあるまいと冷笑つてもゐる。彼の人生觀は利害を超越するところに、その視野を置いてゐる。そして宇宙にさまようてゐる人の子の魂を、大地に引摺下さうとしてゐる。

そこに彼の哲學がある。人生觀がある。宇宙觀がある。女性觀がある。罪惡觀がある。社會觀がある。而も底に彼の信仰が燃えてゐる。彼とは勿論莊子であるが亦た播陽岡田君其の人でもある。

大正癸亥五月

好尚 木崎 愛吉

大正十二年七月十日印刷
大正十二年七月十五日發行

地獄真泉



定價金貳圓五拾錢

著者 岡田 播 陽

發行者 大井 樸 應
東京市外上駒込四百三番地

印刷者 吉田 松 次
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所

東京市神田區仲猿樂町十九番地

曉 聲 社

電話九段一五〇七番
振替東京一七四九〇番

(秀英會印刷)

工78 33

高楠博士序、近重博士跋
荒井寛方、大野静方兩畫伯裝幀

臨濟宗大學長
神月徹宗師著

西天東土

菊版二百三十餘頁
口畫美麗刷二十四頁
本文挿畫二百餘種
本支挿畫最上函入
天金布裝五圓也
定價金五圓
得留送料二十七錢

著者か支那、南洋諸島、印度、の旅行記にして佛教々祖著名の舊蹟を悉く網羅し。前人未到の難處を踏破して記事と共に一々寫眞を添へ、坐して佛教傳來の古道場に參到せしめ、加ふるに各地の風俗人情等を描寫して、眞に一讀歴遊の感あらしむ。佛祖の靈跡を憧憬するものは以て覽るべく、東洋の風物を知らんとするものは以て讀むべきの書なり。寫眞二百餘種頗る鮮麗に、裝幀も亦た甚だ美なれば客室、應接室に備へて趣味頗る深きものなり。

會根 玄昌 著

來るべき宗教

四六版二百頁
布裝函入上製
定價金壹圓五十錢
小包送料十二錢

本書は、宗教革命の深刻痛烈なる叫びにして、更に革命に伴ふ具體的進路を指示したる點は著者の最も用意したる處なり。著者が二十有餘年の僧院生活に親しく味得したる既成宗教の矛盾と墮落は現代文明の嚴正批判に照破されて最早坐視する能はず、敢然として舊き自己の地位と周圍の誹謗を排除し、新しき人類生活に宗教の體現を試みたるものは實に血肉淋漓の感あらしむ。

終